

資料 8-1. 町民アンケート調査結果の概要

1. 環境基本計画と環境報告書の認知度

環境基本計画と環境報告書の認知度についてはどちらも「知らない」という回答が特に多く、**内容を知る層は少ない**結果となった。前回アンケートとの比較では環境報告書の認知度は大きな変化はなかったものの、環境基本計画の認知度は、「知っており、概要版を読んだことがある」の割合が大きく低下しており、「知っており、概要版を読んだことがある」の割合も低下していた。また、環境基本計画と環境報告書ともに認知が進んでいるのは60代以上の高齢者であり、**10～20代はほとんど認知が進んでいない**ことから、今後は、若い世代にむけた情報発信が重要であると考えられる。

2. 寒川の環境イメージ

寒川の環境イメージについては「緑が豊かなまち」「静かなまち」「穏やかな気候のまち」と感じている町民が多く、**緑が多く閑静な環境が比較的高く評価**されていることが伺える。特に、大蔵地区での「緑の多いまち」の比率が高くなっていった。一方で「野生生物（動物や植物）が多いまち」「将来、都市化が進むまち」の回答は少なく、緑が多いものの動植物の多さはあまり感じられておらず、都市化の進展もあまり感じられていない。

3. 周辺環境に対する満足度

周辺環境に対する満足度については**空気のきれいさや身近な緑や川への満足度は高**くなっている一方で、騒音・振動・悪臭などの近隣環境や散乱ごみ・不法投棄などの美化環境、景観・道路などの都市環境に対する不満は比較的高くなっており、暮らしにおける音や臭い、まちの美観等の改善が求められていると考えられる。中でも、田端地区における美化環境と都市環境、大蔵地区における近隣環境に対する改善が強く求められている。

4. 環境活動への参加状況

環境活動への参加状況については参加していない層がやや多くなっている。理由としては、「日時が合わなかったため」「面倒と感じたため」という回答が多くなっており、開催日時の問題と参加意識の低さが主な理由となっている。また、その他の回答に「活動内容や日時を知らなかった」「活動があることを知らなかった」などが多く、20代、30代、居住年数10年未満の参加割合が低くなっていたことを含めて考えると、転居してきた子育て世代への情報発信が不足していたのではないかと考えられる。

5. 参加した環境活動

環境活動に参加した層については、「ごみ拾いなど環境美化活動」「ごみ分別や減量などの活動」への参加は高かったものの、前回よりも割合は減少しており、環境美化・ごみ関連活動への参加意欲の低下が伺える。さらに、「環境に関する講座」「自然観察会」への参加者はごく限られている。

今後参加してみたい環境活動については、「ない」が最も多く、次いで、「ごみ拾いなどの環境美化活動」となっていたことから、活動への参加意欲のない層が多いものの、美化活動へのニーズもある程度存在する状況が見られた。

6. 身近な自然環境に対する満足度

住まい周辺の自然環境に対する満足度については、各項目において**肯定的な意見が多**くなっている。「不満」の回答はわずかであったものの、田端地区における「川や水路などの水辺について」の満足度の低さが目立っている。

自然環境とのふれあう機会については、ここ1年間の間では「機会がなかった」が最も多いものの、次いで「川など水辺の散策」「川など水辺で生き物採集」となっていることから、町民において、**ふれあいの中心は川をはじ**

めとした水辺である状況が伺える。また、地区によって差異が見られ、中瀬地区において、全般的に自然にふれあう機会が低くなっている一方、大蔵地区、宮山地区、小動地区においては「川や水辺の散策」が比較的多くなっている。

それに伴い、自然とふれあう上での不満点は、「水辺に親しめる場所がない」「川にごみが多い」「川の水が汚い」が多く、散策の場として親しまれており、ふれあう機会の多い**水辺環境の改善**が求められている。しかし「不満はない」との回答も20%以上あり、現在の環境に満足している町民も比較的多い結果となった。

自然環境を保全する上で不十分なことについては、「河川の水質をきれいにする取り組み」が最も多く、前述の自然とふれあう上での不満点と同様に水辺環境の改善が求められている状況が伺える。また、「緑を保全する取り組み」「ごみ拾いなどの美化活動」「外来生物の拡散を防止する取り組み」の割合も30%前後であったことから、水質だけでなく多岐にわたる取り組みが求められている。

7. 身近な公害問題を感じる状況

身近な公害問題については、「川や水路などの汚れや臭い」と「車からの排気ガス」が町内において最も問題視されている。川や水路などの汚れや臭いの要因としては「ごみが捨てられているため」が特に多く、**水辺のごみ問題に対する意識が強い**ことが伺える。また「工場や事業所からの煙や臭い」「工場や事業所からの騒音や振動」の否定的回答が「一般家庭からの煙や臭い」「一般家庭からの騒音や振動」の否定的回答よりも多かったことから、**工場の公害問題は一般家庭の公害問題よりも問題視**されていると考えられる。田端地区は多くの項目で「感じる」が多くなっていたことから、身近な公害問題が比較的多い地区であることが考えられる。

公共交通の利用状況については「利用していない」が33.0%、「どちらかと言えば利用していない」を合わせると約6割になり、町民においては**あまり利用されていない**状況が伺える。しかし、10代、80代、学生においては「利用している」との回答が特に多くなっており、運転免許証のない層にとっては重要な移動手段になっていると考えられる。

公共交通を利用しない理由については、自家用車を利用するとの回答が多く、具体的には「バス停や駅が遠い」「小さい子供がいる」「仕事の都合上」などが挙げられた。また、「バスの本数が少ない」「バスの運行ルートが少ない」「鉄道の本数が少ない」も主な理由となっており、大蔵地区において顕著に表れていた。公共交通の利用を促すために、バス・鉄道の運行状況の改善が求められているものと考えられる。

8. 身近な都市環境の満足度

住まい周辺の都市環境の満足度については「神社やお寺など文化的環境について」が「満足」と「やや満足」を合算した肯定的回答が90%以上を占め、各地区においても満足度が高いことから、**寒川神社をはじめとした文化財が町民全体に親しまれている**状況が伺える。それに対して、「散乱ごみや不法投棄について」「道路整備について」は否定的回答が5割を超えていることから、多くの町民から改善が望まれていると考えられる。特に、「散乱ごみや不法投棄について」は田端地区、小動地区において、「道路整備について」は小動地区において「不満」が多くなっていた。

9. ごみの量が増えてしまう原因

ごみの量が増えてしまう主な原因としては、「**商品などの過剰包装が多い**」が特に多く、商品側の問題が大きいと考えられている。しかし、「ごみの問題に関する意識が低い」が2番目に次いでおり、消費者側の意識不足も大きな問題として捉えられている状況が伺える。

日ごろ行っているごみの減量化の取り組みについては、「ごみを出すときは日時や分別などのルールを守る」「買い物にマイバッグを持参する」がかなり多く、**分別等ごみ出しルール遵守、マイバッグの持参は、広く行われている**と考えられる。特に「買い物にマイバッグを持参する」においては前回アンケートから大きく増加しており、定着の広がりが見られる。これは、近年、様々な店舗で**レジ袋の有料化が進んでいる**ことが要因の1つであると想定される。

リサイクルに関しては、「缶・ビン・容器包装などは、きれいに洗ってから出す」が多く、分別収集とともに、**ごみ出しルールを通じたリサイクルは広く行われている**状況が伺える一方で、**リサイクル品を活用する取り組みはあまり行われていない**。また、10代において、リサイクル品やフリーマーケットの活用等があまり行われておらず、20代において、マイバックの持参や分別ルールを守るなどがやや少なくなっており、若年層において取り組みがやや滞っている状況がうかがえる。

日ごろの生活の中で、ごみを減らすのに問題と感じていることについては、「ごみになるものが多すぎる」と特に多く、**容器包装等、日々の暮らしで生じるごみの多さが問題視**されているものと考えられる。前回アンケートに比べ、「特に問題がない」が増加し、主要問題である「ごみになるものが多すぎる」が減少するなど、総体的には問題が縮小する傾向がうかがえる。一方で「ごみの分別が複雑すぎる」や「ごみを減らすための情報が少ない」は増加しており、分別の分かり易さや情報提供への要望はやや高まっている。

10. 家庭で取り組んでいる省エネ

家庭での省エネを意識した取り組みの状況については、何らかの取り組みを行っている層は83.0%を占めており、**一定水準の省エネは広く浸透**していると考えられるが、より積極的な層を広げる施策が重要と考えられる。取り組み内容については、「水を出しっぱなしにしない」「電気をこまめに消す」など、明らかなエネルギー・資源の無駄遣いに対する取り組みはかなり実施されている。しかし、手間やコストのかかる取り組みに関してはあまり行われていない結果となった。

また、省エネに関する取り組みをしていない理由については、「習慣になっていないため」が特に多くなっており、省エネを進めるためには行動を習慣化する普及策の強化が重要であると考えられる。他にも、「効果が目に見えないため」の回答も多くなっていることから、効果の可視化も重要であると考えられる。

11. 地球温暖化の原因

地球温暖化の原因について知っているかについては、**一定水準の認知は広く浸透**しており、今後はより詳しい知識の普及が課題となる。10代、学生において「知っている」が特に多くなっていることから、学校教育による効果が表れていると考えられる。

地球温暖化の原因を知っている層において、地球温暖化の影響については、どのようなものを知っているかについては、「異常気象の増加」が78.6%と最も多くなっていた。次いで「北極や南極の氷や氷河の減少」「自然生態系への影響」「熱帯低気圧（台風）による被害の拡大」など、異常気象を筆頭に多くの影響が広く知られている。前回アンケートに比べ、「熱帯低気圧（台風）による被害の拡大」が大きく増加しているのは、近年多発している豪雨や台風被害など、より具体的に影響が実感できているからであると想定される。

日ごろの生活で取り組んでいる地球温暖化防止策としては、「家庭での省エネに取り組んでいる」が特に多くなっている。これは、前述の家庭での省エネを意識した取り組みの状況と重なる結果である。しかし、**前回アンケ**

ートに比べ「家庭での省エネに取り組んでいる」が減少しており、省エネ意識がやや緩んでいる状況がうかがえることから、今一度、意識啓発などを行う必要があると考えられる。

地球温暖化対策として特に何もしていない理由としては、「その他」が最も多く、その記述回答は様々であるが、「よく分からないため」が多く、知識不足が主な理由となっている。選択項目では、「自分が取り組んでも何も変わらないと思うため」「面倒と感ずるため」が多く、**効果が実感できないこと、面倒さなどが取り組みを阻む主な具体的要因**となっていると考えられる。

12. マイクロプラスチック問題に関する認知度

マイクロプラスチック問題に関しては、**8割近くの町民に認知**されているものの、10代において「知っており、関連する取り組みを行っている」が0%となっている。30代をピークに年齢が上がるほど少なくなっており、若年層、高齢者において、マイクロプラスチック問題に対する取り組みへの意識は低くなっている。行っている取り組みについては、マイバックの持参と分別の徹底は比較的行われているが、ごみ拾いイベントへの参加はほとんど行われていない。また、当設問においては無回答が41.6%と多くなっていることから、マイクロプラスチック問題に関連する具体的な取り組みについてあまり知られていない状況も伺える。

13. SDGsの認知度

SDGsについて知っているかについては、「知らない」が52.5%、「あまり知らない」が21.7%と、計74.2%において知られておらず、**認知はあまり広がっていない**。10代では、「SDGsで取り組むべき事項を知っている」が0%であり、また、20代、70代以上においても比較的少なくなっていることから、若年層、70代以上の高齢者層に対する情報発信が必要であると考えられる。

14. 「環境のまち」としての寒川の将来像

寒川町は将来どのような「環境のまち」であって欲しいかについては、**緑の豊かさ、空気や水のきれいさ、まちの清潔さが多く望まれている**結果となった。前回アンケートに比べ「緑が豊かなまち」が若干減少しているが、その他の項目は全て前回アンケートよりも増加している。属性別集計では、10代において「便利で快適なまち」が特に高くなるなど、他世代とやや異なる傾向が見られた。

寒川町の環境のよい例として残していきたいものとしては、「中央公園の桜」「川沿いの自然（目久尻川・相模川・小出川）」「農地（畑、田んぼ）」をはじめとした**豊かな自然を残したいという意見がかなり多く**挙げられており、その理由としては「四季を感じることができる」「癒される」「散歩するのに良い」などが多かった。反対に、好ましくない場所としては公害やゴミのポイ捨て・不法投棄、道路整備などが多く挙げられており、その他の自由意見においても同様の意見が多く挙げられていた。

15. その他自由意見と全体のまとめ

その他、自由意見においては公害やゴミ、道路整備に関する否定的な回答が多く挙げられていた。アンケート全体を通して今後の寒川町の課題としては、**自然環境を保全しつつも、生活環境を改善していく**ことが重要であると考えられる。それと同時に、環境問題全般に関する意識啓発を行っていくことで、環境問題についてより身近に感じてもらい、**一人ひとりが考えるきっかけを作る**ことが必要であると考えられる。